福島大学地域創造
第34巻 第１号 １～３ページ
2022年９月

Journal of Community future design center, Fukushima University 34 (1): 1-3, Sep 2022

―地域の窓―

令和４年度　福島大学　foR-Aプロジェクトに指定された「戦後日本社会科学エゴ・ドキュメント・アーカイブの構築と活用――国際的研究拠点整備による福島県の歴史研究の再活性化」

福島大学行政政策学類　阪本尚文
福島大学行政政策学類　金井光生
福島大学名誉教授　菊池壯藏

Construction and Utilization of an Archive of Postwar Japanese Ego-documents: Reinvigorating Historical Research in Fukushima Prefecture through the Development of an International Research Center

NAOFUMI Sakamoto, KOSEI Kanai, SOZO Kikuchi

敗戦直後から1950年代にかけて，戦後経済学史の泰斗，小林昇は本学経済学部を国内有数の研究機関に育て上げ，その薫陶を受けた本学の経済史研究者は，封建制から資本主義への移行をめぐって，地元の郷土史家の協力も得つつ福島をフィールドとする歴史研究を続々と発表し，学界に強い衝撃を与え続けた[1]。だが，有力な研究者が東京大学や東北大学に移籍したことや，経済史研究の主題が移行期研究から資本主義研究へと変化し工業地帯が望ましいフィールドになる反面，福島をフィールドとする優位性が失われたことで，60年代後半以降，福島県の組織的な歴史研究には，一時ほどの興隆は見られなくなった[2]。かつて「福島学派」と称された本学のスタッフが中心となり福島を舞台に行われた歴史研究が我が国の社会科学をリードしていた事実は，今日県民にさえほとんど知られていない。

こうした中で，福島県内唯一の国立総合大学であり，我が国の歴史研究の最先端を走った本学に国内外の研究者が利用可能な研究拠点を整備することは，地域の歴史研究を再活性化する一助になると思われる。これが，本プロジェクト[3]が目指すものである。実際のところ，戦後日本の社会科学の生成と展開の過程を実証的に検討するための貴重資料が，本学にはほとんど未活用のまま放置され，さらに，新たに集積されつつあるがゆえに，「福大の顔」となる歴史研究センターの創出は，きわめて低コストで可能である。

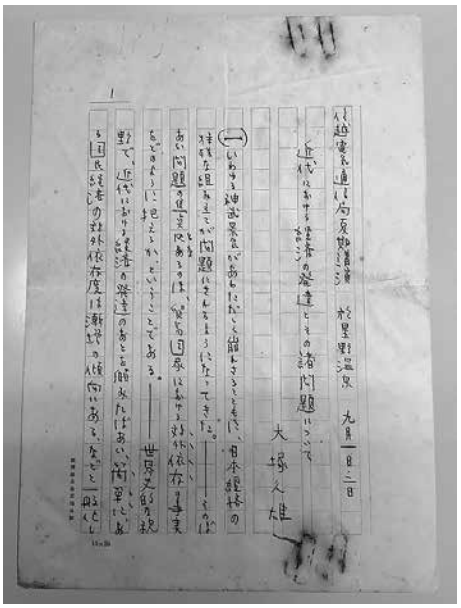
具体的には，まず20世紀日本を代表する経済史家，大塚久雄の蔵書を所蔵する本学附属図書館大塚文庫には，大塚の読書ノート類（写真１）や講演草稿が未整理のまま保管されている。また，比較経済史学（大塚史学）から出立し，リスト，スミス，重商主義という３つの領野（「デルタ」）を生涯耕し続けた前述の小林の福島時代（1940-50年代）の日記が，2021年に本学経済学部OBの原田哲史氏（関西学院大学経済学部教授）や故，吉原泰助本学元学長らの尽力を得て遺族から附属図書館に寄贈されたが，整理・調査の上で公開する目処は立っていなかった。さらに，大塚理論をフランス革命史に応用して戦後日本の社会科学に多大な影響を与え，憲法学にも足跡を残したフランス革命史家，高橋幸八郎の日記の提供を遺族から受けた阪本は，

古書店で購入した高橋宛の書簡（科研費（18K12623）及び学内競争的研究資金（21RI003）の分配を受けて整理・目録の作成を行なった）とともに，附属図書館に寄贈することを予定している。これらのエゴ･ドキュメント（日記,書簡などの１人称で書かれた資料）は，戦後日本の人文・社会科学が前提としてきた比較経済史学の理論的基盤の新たな一面やその国際的特徴を明らかにするための基礎資料であり，大塚文庫で一体的に公開することで，本学食農学類に整備中の旧農文協図書館・近藤康男文庫[4]とも大きな相乗効果が生じることが期待できる。

整理手順としては，草稿類，書簡，日記について，いずれも劣化を防ぐために資料保存用封筒に入れて燻蒸し，中性紙保存箱（「もんじょ箱」）に収納するとともに，整理番号，各巻の表題，作成年，概要などを記載した目録を作成している（写真２）。目録は，プライバシー保護に留意しつつ本学附属図書館HPで一部を公開する予定である。作業については，国際基督教大学で大塚の薫陶を受け，立教大学大学院で小林の指導を受けた菊池の協力を仰ぐこととした。また，公開をめぐる法的問題については，阪本及び金井が問題の洗い出しを行い，これまでなされてこなかった閲覧者用の申請書の様式の検討も行っている。公開条件の法的側面での整備がなされなければ，本学が潜在的な訴訟リスクを抱え続けることになりかねず,その検討(写真撮影を認めるか，メモを採ることは可能かなど）は喫緊の課題である。

さて,近年欧米の歴史学の主要な動向の１つとして，エゴ・ドキュメントへの関心の高まりをあげることができる。エゴ･ドキュメントが注目を浴びるとともに，そこから派生する歴史理論の開拓も進んでおり,エゴ･ドキュメントを読み解く方法として，史料に照射される「主観性」をめぐる理論やその「主観性」を組み込んだかたちでのマクロな構造分析への視座も，提示されようとしている[5]。我が国でも，立命館大学が戦後日本を代表する評論家，加藤周一の蔵書・草稿類を備えた加藤周一文庫を，東京女子大学が戦後日本を代表する政治思想家，丸山眞男の蔵書・草稿類を所蔵する丸山眞男文庫を，それぞれ設置したことは記憶に新しい。福島大学に，大塚・小林・高橋という戦後社会科学の３巨匠のエゴ・ドキュメント・アーカイブを創出することは，歴史学分野のみならず，文書館学などの分野でも，福島大学の知名度向上に資するであろう。

公開予定資料のうち，敗戦直後の福島県の知識社会の模様を記録する小林日記は，地域史上も重要である。同時に，本プロジェクトは，本学の知名度を国際的に高めるとも予想される。朝鮮総督府の官僚であった守屋栄夫文書（国文学資料館所蔵）と同様，韓国人研究者による高橋日記・書簡の利用も想定されるからである。高橋が修業時代を過ごした植民地朝鮮の京城帝国大学法文学部には東京帝国大学出身の優秀な若手文系研究者が集い[6]，その多くが敗戦後に我が国の人文･社会科学の中核を担う人材となっていった。だが，日本の知識社会に与えた影響の大きさにもかかわらず「京城学派」研究が本格的に開始されたのは近年になっ



（写真１）
新たに発見された大塚の講演草稿
（阪本撮影）

（写真２）
大塚の読書ノート類の整理作業（阪本撮影）

てからであり，公法学分野などでは研究が進展している一方[7]，京城帝大では西洋史学が国史や東洋史に比して軽視されていた事情[8]も作用し，西洋史学分野に関する先行研究は少なく，高橋日記・書簡には，植民地大学研究の空白を埋める効果も期待できる。

（阪本　尚文）

1　拙稿「福島学派の遠雷 ── 草創期福島大学経済学部の教官群像と井上紫電の軌跡」『行政社会論集』第33巻第４号，2021年３月，1-40頁〈http://hdl.handle.net/10270/5328〉；河西英通「東北自由民権研究の世界」同『東北史論 ── 過去は未来に還元する』（有志舎，2021年）第７章を参照。

2　白鳥圭志「「経済史学の福島学派」の興隆と衰退 ── 1950年代中葉から60年頃までの一齣」拙編『知の梁山泊 ── 草創期福島大学経済学部の研究』（八朔社，近刊）第４章を参照。

3　概略として，福島大学HP〈https://www.fukushima-u.ac.jp/news/Files/2022/05/16101.pdf〉（2022年６月25日最終閲覧）。

4　林薫平「福島大学食農学類における旧農文協図書館・近藤康男文庫の継承と活用に向けて ── 戦間・戦中・戦後・高度成長期を貫く“近藤農政学”の視座と福島県農村の震災復興への示唆」『農業史研究』第５号，2022年３月，27-37頁を参照。

5　長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』（岩波書店，2020年）２頁。

6　吉見俊哉『大学とは何か』（岩波書店，2011年）146頁。

7　石川健治「コスモス ── 京城学派公法学の光芒」酒井哲哉編『岩波講座「帝国」日本の学知 第１巻「帝国」編成の系譜』（岩波書店，2006年）第５章など。

8　Soo-Hyun Mun,“A portrait of a Japanese history Professor at Keijo Imperial University, Korea”, *Interventions*, vol.2, 2019, p.426；永島広紀「京城帝国大学法文学部の史学系講座とその歴史学研究 ── 台北帝大，満洲・建国大学との比較的視点を踏まえた考察」小澤実・佐藤雄基編『史学科の比較史 ── 歴史学の制度化と近代日本』（勉誠出版，2022年）246頁を参照。